

か ざ

ぐる ま

風 車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2025 夏号

109

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 大芝遺跡の発掘調査 (概要・古代・中世編)

大芝遺跡調査区 4 全景と目高川 (南西から)



特集 大芝遺跡の発掘調査（概要・古代・中世編）

はじめに

大芝遺跡が所在する日高郡日高川町は、和歌山県中央部にある日高平野と平野を流れる日高川の中・下流域に位置しており、平成17年に旧川辺町、美山村、中津村が合併して発足しました。西は御坊市、日高郡日高町、北は有田郡広川町、有田川町、東は田辺市、南は日高郡印南町と接しており、県内第3位の面積を有する町で、古くから果樹栽培や林業が盛んであり、特に備長炭生産は日本一を誇ります。日高川町には東西に県内最長の日高川が流れ、その浸食によって形成された河岸段丘が多くみられます。

大芝遺跡は日高郡日高川町（旧中津村）佐井に所在しており、県下第2位の面積を誇る日高平野に流れ込む日高川の中流域に位置し、大きく蛇行を繰り返す地点の日高川右岸の河岸段丘の一部が縄文時代の遺跡として知られています。遺跡は南北約320m、東西約160mの範囲に広がっており、周囲には水田が数

多く広がります。

昭和40年代に行われた分布調査では、昭和28年7月18日に発生した和歌山大水害後の復旧工事において水田下から石鏟や縄文土器が露出したことが報告されていますが、今回の調査が初の本格的発掘調査となりました。

今回の調査について

今回の大芝遺跡の発掘調査は県営中山間総合整備事業佐井井地区ほ場整備事業に先立って行われました。調査は令和6年5月から令和7年3月まで行われ、調査面積は13,284.11㎡です。

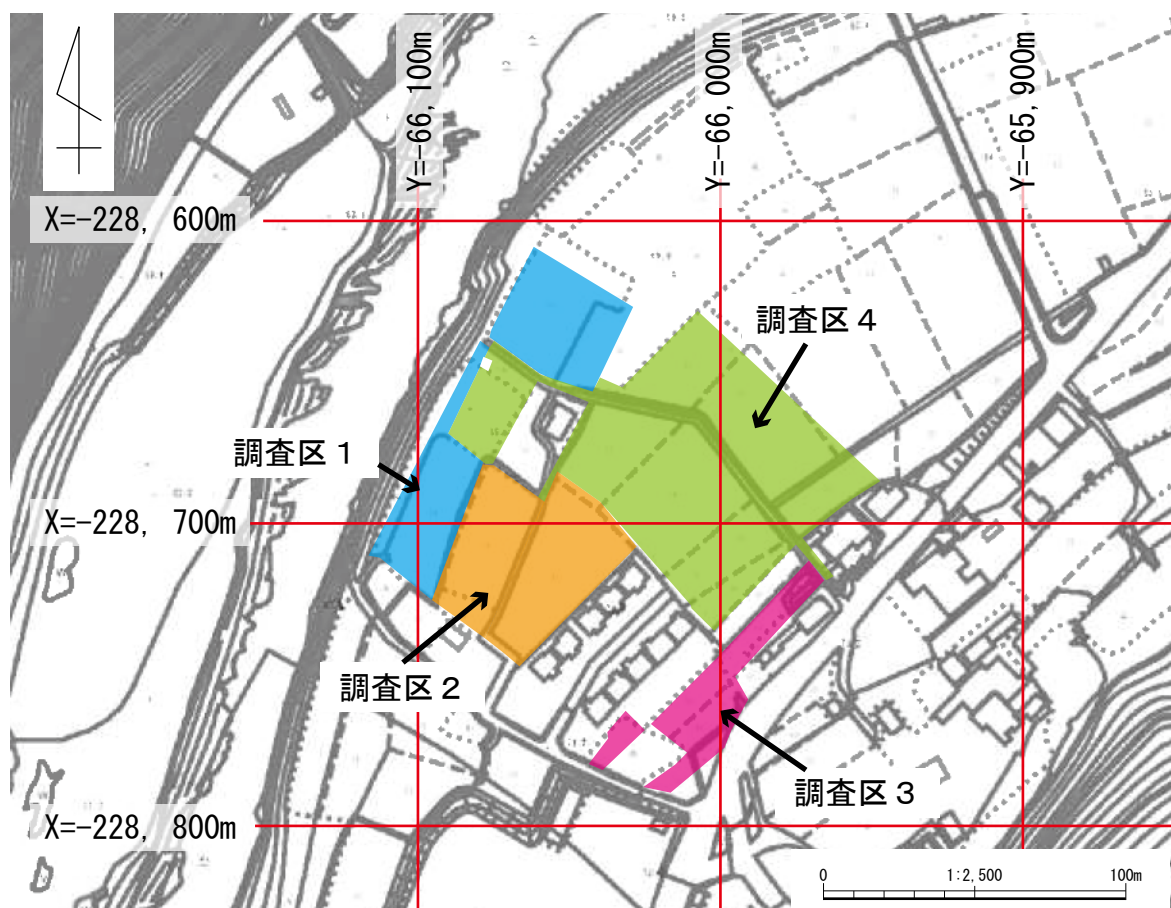


図1 大芝遺跡調査区位置図（日高川町提供地図に加筆）

大芝遺跡の発掘調査では、主に古代から中世とその下層から縄文時代の遺構が確認されました。また、確認した遺構は総数2,000を超えることから、今回の風車109号では発掘調査の全体的な概要と古代から中世にかけての遺構・遺物について、次号以降で縄文時代の遺構・遺物について解説していきます。

古代から中世の遺構

古代から中世の遺構は調査区1～4区全てで確認しました。調査区の土層の堆積状況を観察すると、古代から中世の遺構面は上部を後世の耕作などによって大きく削られてしまっており、元々の遺構の深さよりも浅くなっている遺構が大半であると考えています。今回はその中でも代表的な遺構を紹介します。

掘立柱建物1（写真1・2） 調査区4で検出した南北6.8m、東西5.0mの掘立柱建物跡です。柱穴の間隔は約1.0～2.5mの総柱建物で、北・南側に庇があったと考えられます。中世の土師器が少量出土しています。

224（481）溝 調査区2で検出した北西から南東に延びる検出長36.0m、最大幅1.2

の溝で北西部は調査区外へ更に延びると思われる。埋土から瓦器片が出土しています。

1066溝（写真1） 調査区4で検出した南北、東西方向に「て」の字状に延びる検出長67.0m、最大幅1.2mの溝です。溝から北及び東部では遺構の遺存状況が悪く、また遺構数も大きく減ることから、集落や墓域を区画する溝であった可能性が考えられます。埋土から土師器などが出土しています。

土壙墓群（218・237・251・261・281・349・358・366・367・372・374・381・382・1277・1278・1279・1280ほか）（写真3） 調査区2及び4の南部で検出した土壙墓群です。平面形



写真1 調査区4南部完掘状況（北西から）

まとめ

状は径0.5～0.8mの円形や楕円形で深さは0.2～0.6mを測ります。上部には0.1～0.5m程度の川原石などを置く、もしくは積み上げており、これらの川原石はやや土坑の中心に向かって落ち込んでいるものが多くみられます。これは土坑の中に埋めた遺体などが腐敗し、その腐敗した部分に上部の土や石が落ち込んだ結果と考えられます。出土遺物は少ないですが、土師器・瓦器・鉄製短刀・繊維製品などがあり、遺物や石の状況から中世の土壙墓群と判断しました。



写真2 掘立柱建物1（北東から）

大芝遺跡で確認した古代から中世の建物跡は、現在のところ掘立柱建物1のみであり、調査区4では人々が住んでいた集落が広がっていたというのはいくつかの状況です。その一方で、令和5年度に同じ日高川町佐井で発



写真3 381 土壙墓の石検出状況（北から）と出土した短刀

掘調査を行った前田遺跡（風車105号参照）で確認した中世の遺物や、今回大芝遺跡で出土した遺物の中には中国製白磁碗や備前焼の破片が見られることから、調査区の近くに集落があったことは間違いないと考えられます。では、調査区では古代から中世の間、どのような景色が広がっていたのでしょうか？ 手がかりとなるのは多数の土壙墓です。特に調査区2と4でまとまって発見された土壙墓群の存在によって、周囲は墓域として使用されていた可能性が高まりました。また、調査区4の横断する1066溝を境に、溝の北と東側の遺構の分布密度が減少することから、この溝が墓域を表す区画溝であった可能性も考えられます。その場合は、1066溝を横切るように検出した掘立柱建物1は、溝が埋められた後に建てられたか、反対に掘立柱建物1が必要なくなり、取り壊された後に1066溝が掘られたと考えられます。

1066溝と掘立柱建物1にはそれぞれどのような役割があったのでしょうか？ そして、土壙墓に埋葬された人々はどんな暮らしをしていたのでしょうか？ 整理作業を通して、今後この謎を明らかにしていきたいと考えています。

（濱崎 範子）

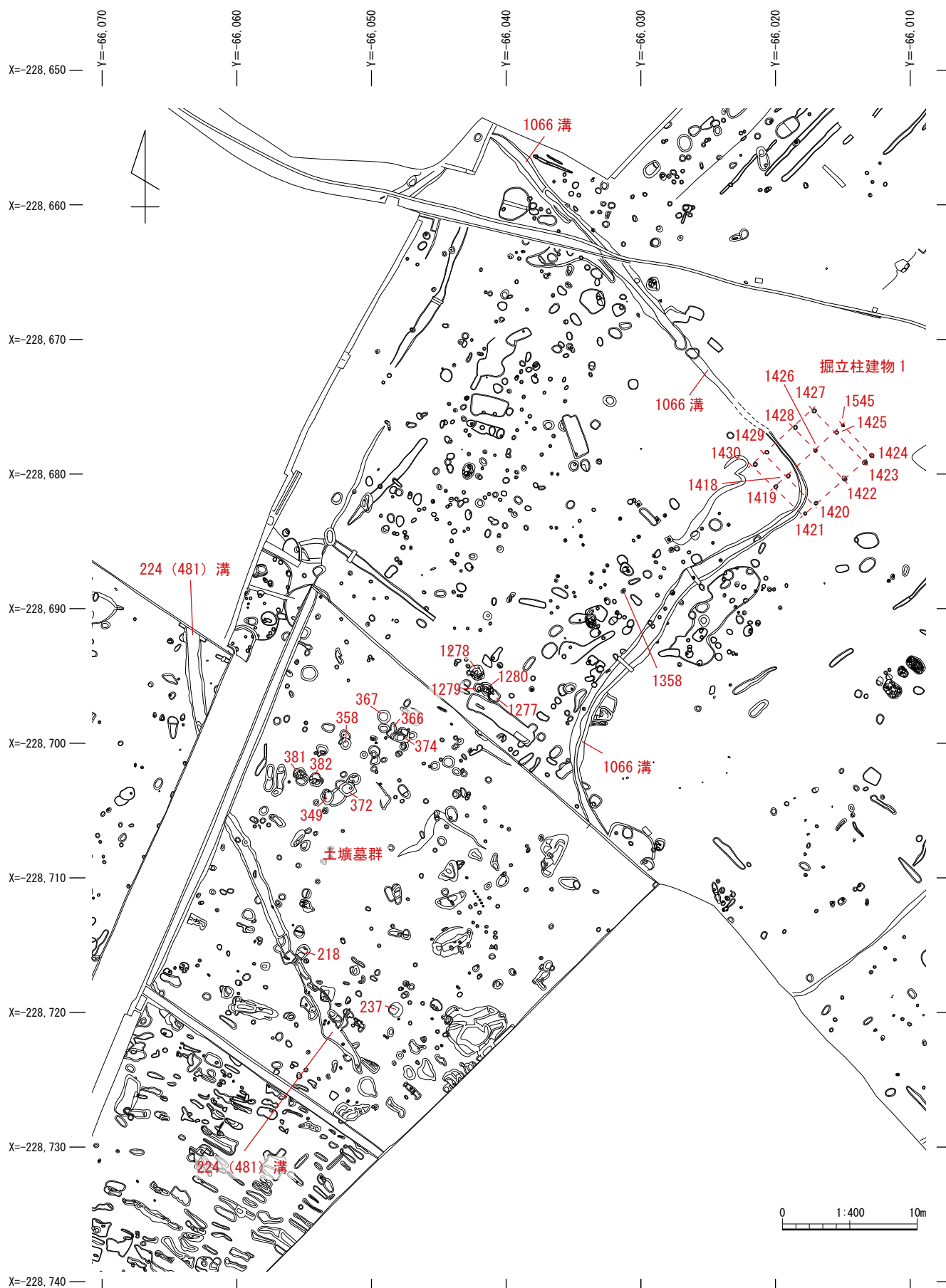
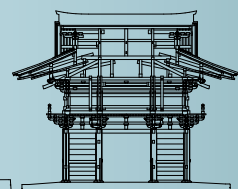


図2 調査区2・4遺構位置図（一部） S = 1/400



名手役所主屋前土塀復旧工事

江戸時代後期の姿を今に伝えるため、史跡整備が進む名手役所（紀の川市）。これまでに主屋、離れ・蔵の復旧工事を重ねてきたこの史跡で、昨年度、破損していた構造物を新たに復旧しました。それは、かつて主屋南側の庭を囲んでいた「土塀」です。

今回の土塀復旧では、約30年前から風化が進み、長く失われていた姿を、わずかに残された資料や仕様を手がかりに、歴史をたどるように再現することを試みました。復旧のヒントとなったのは、解体直前に撮影された写真（写真1）と、現在まで残されていた土塀の一部。これらをもとに、江戸時代後期に存

在した姿の再現を目指しました。

作業開始時にとりわけ苦労したのが、東側の入口付近です。土塀は基礎の石積みまで崩れ落ち、かつて通用門が存在したことを示す痕跡が主屋の柱に残るものの、門本体の部材は全て失われていました。門の復旧は断念せざるを得ませんでした。現存部分の構法にならって積み直し、基礎石積みは本来の状態に戻すことができました（写真2）。

土塀の内部構造を担う土壁内の石積みは、時間の経過とともに崩れていましたが、全てを積み直すことはせず、再用できる部分を整えながら表面を清掃しました。すると整然と積まれた石が姿を現し、当時の仕様が明らかになりました（写真3）。

土壁部分は、積み上げるための型枠を組み、土を一層ずつ詰め、叩き締めながら、内部の石積みを行いました。また、構造補強として

錆対策を施した鉄筋を仕込み、目指す姿を少しずつ形にしていきました。積み上げを完了したら乾燥期間を設け、瓦葺きの工程へ進みました（写真4）。発掘調査時の表面採集で見つかった棧瓦を再利用し、不足分は同じ文様で新調しました。さらに、古写真や主屋の屋根瓦を参考にしながら、他の瓦も再現しました。仕上げには漆喰を塗り、主屋の庭に土塀が完成しました（写真5）。季節の寒暖差や天候を留意しつつ、土をこね、石を積み、瓦を並べる手仕事によって、失われた景観が少しずつ戻ってきました。（大給 友樹）



写真1 解体前の土塀
（主屋・離れを西からみる）



写真2 土塀東側入口の復旧状況



写真3 土塀表面の壁土を清掃した状況



写真4 瓦葺き作業の状況



写真5 主屋前土塀の竣工状況

文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物(8)

今回は、近世中期の土木工事や享保の改革での新田開発で活躍した、紀伊・溝口村(現・海南市野上新)出身の井澤弥惣兵衛為永(以下「弥惣兵衛」)に関連させて、以前より筆者が気になっていたことを綴ってみます。

きっかけは昨年度、広川町の日蓮宗寺院・養源寺での建造物調査に始まります。養源寺は、宝永地震の津波被害後、紀伊5代藩主・吉宗公の計らいもあり、現在の地へと寺地を移されます。境内には吉宗公の母・浄円院とも縁のある「出世大黒天」を祀った大黒堂が本堂と並び建ちます(上写真)。寺地の北側「院の馬場」と呼ぶ範囲は、当時の新田開発で開墾されたと伝わります。その開発には弥惣兵衛も関与したのだろうな、と想像が膨らんでしまいました。

さて、弥惣兵衛の生誕地に近い野上八幡宮の拝殿前には、弥惣兵衛の寄進と伝わる手水鉢があります(下写真)。前面には「溝口村生/井沢宇左衛門尉/氏勝/元禄三庚午年五月」と刻まれています。元禄3年(1690)は、弥惣兵衛(＝氏勝)が紀伊藩の役人に登用された時期とも重なります。また、境内に数十存在する石燈籠を眺めていると、そのほとんどが「□□三年」に寄進または奉納されて来ていました。手水鉢も含めて八幡三神と関連付けられたものなのか、近世期の信仰のあり方が気になる事象でした。

(下津 健太郎)



養源寺の大黒堂(建物は昭和戦前期の再建、右奥は江戸中期再建の本堂)



野上八幡宮の拝殿前にある、井澤弥惣兵衛寄進の手水鉢(後方の石燈籠は「慶安三年」の寄進)

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

埋蔵文化財課

「S字甕」が和歌山にやってきた件

あいち朝日遺跡ミュージアムで『企画展「S字甕」というとても薄い甕が流行っていた件』(令和7年4月～令和7年6月)が開催され、5月の連休中に帰省した際に見学してきました。まず、「S字甕」がどういったものかというところ、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて伊勢・尾張地域を中心に流行した土器で、正式には「S字状口縁台付甕」と呼ばれています。名前にあるとおり、アルファベットの「S」のように屈曲する口縁部をもち、底には脚台部が付きます。また、器壁が非常に薄く作られており、とても軽量な点も大きな特徴です。「S字甕」は弥生時代終末期に伊勢湾周辺地域で生み出されたと考えられています。古墳時代に入ると全国的に分布がみられるようになり、和歌山県内でも「S字甕」や「S字甕」の可能性のある土器が出土しています。和田岩坪遺跡発掘調査(風車103号参照)では、「S字甕」の可能性のある口縁部片(写真1)と脚台部(写真2)が各1点出土しました。また、八反田遺跡発掘調査でも、「S字甕」の口縁部片が出土しました(風車107号参照)。これは、弥生・古墳時代の伊勢・尾張の人々と、和歌山の人々が交流していたことが垣間見える、貴重な資料と考えられます。

(石丸 彩)



写真1 「S字甕」の可能性のある口縁部



写真2 「S字甕」の可能性のある脚台部

【参考文献】松本彩・原田幹2025『企画展「S字甕」というとても薄い甕が流行っていた件 展示パンフレット』あいち朝日遺跡ミュージアム

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報（2025 年 夏 ～ 2025 年 秋）

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 夏期企画展「高野山麓・山里のしごと」 2025 年 7 月 12 日（土）～ 2025 年 9 月 7 日（日）
- 展示講座②（夏期企画展） 2025 年 8 月 24 日（日）

和歌山県立博物館

- 企画展「祇園南海の誌と書—教養・芸術・心情—」
2025 年 6 月 14 日（土）～ 2025 年 7 月 21 日（月・祝）
- 夏休み子供向け企画展「くらべてみよう！ふたりの絵」
2025 年 8 月 2 日（土）～ 2025 年 9 月 23 日（火・祝）

和歌山市立博物館

- 企画展「わかやま鉄道物語」 2025 年 7 月 19 日（土）～ 2025 年 9 月 23 日（火・祝）

御坊市歴史民俗資料館

- ミニ展示 1 「気になる木—出土した扇とその背景—」
2025 年 4 月 5 日（土）～ 2025 年 8 月 31 日（日）
- ミニ展示 2 「湯川氏ゆかりの住職と稱名寺・来迎二十五菩薩立像」
2025 年 4 月 5 日（土）～ 2025 年 8 月 31 日（日）

※掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙
- 2 特集「大芝遺跡の発掘調査（概要・古代～中世編）」
- 6 短信「名手役所主屋前土堀復旧工事」
- 7 きのかに歴史小話「文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物（8）」
「埋蔵文化財課 「S字甕」が和歌山にやってきた件」
- 8 催し物案内

風車 109（2025・夏号）

令和 7 年 6 月 30 日

（公財）和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

（公財）和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263 番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp

★公式インスタグラム

ユーザーネーム：**wabunse_official**
イベント情報などを発信しています！